

クソゲーハンター、京の都から神ゲーに挑まんとす

ずーZ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シャンフロで京極とサバイバルに初手で出会う流れが大変自然にキメられる、京極ルート想定 of シャングリラフロンティア二次創作です。あくまで想定です。 ※短編↓連載としました。

## 目次

クソゲーハンター、京の都から神ゲーに挑まんとす	1
京のクソゲーマー2 距離感	13
京のクソゲーマー3 クソゲーフレンズ	18
京のクソゲーマー3.5 元PKの生粋のPK	26
京のクソゲーマー4 メッセージ	31
幼馴染	41
京のクソゲーマー5 ペンシルゴンは話したい	54

クソゲーハンター、京の都から神ゲーに挑まんとす

「ふう。これでLV12。あ、傭兵の双刃の耐久そろそろ半分か」

さつきようやくヴォーパルチョコッパは2本揃ったが、今から使うよりボスとかにとつといて、まずはコレとゴブリンの手斧から使い潰すか。

ボスカ。さーて？ お、ここからならセカンデイルのが近そうだしこのままいくか。

「んん？ なんだ通知音みたいな、ってああこれリアル側からのメール通知か。

シャンフロはそういうの見れる仕様だったか、と？」

差出人：京極

宛先：楽郎

題名：まさかね。まさか、ね

内容：僕との約束事すつつつっかり忘れてたって言うならそのうちラーメン奢ってね？ まあ？ そんなことある訳ないだろうけど？

ハ、ハハハ！ あんなにラーメンのこと小馬鹿にしておいてすつかりと墮ちよつてからに。こやつめ！

しっかしここからファステイアに戻るのか。うーん。

いつそのこと、——ダメだダメだ。

「このままだと京ティメットのやつが機嫌損ねて、國綱さんがそれとなく察して……」

京極が幕末始めた頃の頃、先達としてしっかり指導したその翌日。

学校帰りに何時も通り道場に寄ったら、國綱さんがなぜだか神妙な面持ちで待っていて。

『マイシス……んんっ。』

……京極がいつにも増してやけに冷たいんだ。いや？ 君に非があるんじゃないと言ふ訳じゃないんだがね？ 全然ない。勿論だ。何せ何も聞かされてないからねえっ！

ふう、ふう……いいね？ よし。

さ、——その竹刀シバクからを構えろ楽郎』

何がいいのかさっぱり分からなかったが、その日の稽古が普段の比じゃなく容赦なかったのは身体で覚えている……。VRの感覚をリアルで再現できねえかな。それでも勝てるとは思えないけどな！

まあ。

キャラメイクでもそうだが、彷徨う者にしたことで森からスタートしちまったからって、狩に夢中になって、時間も約束もすっかり忘れてた。

俺が全面的に悪いな。

シヤンフロ内でフレンドになるだけだし、とつとと済ましときや良かった。

「……ファスティア、急ぐか」

今から行く、って返信だけしとこ。

………

お、読める。この門に書いてあるのは、

【始まりの街 ファスティア】か。文体これどうなってるんだ？

「……さーて」

うっわー。街の外も大概だったけど街中はもつと人混みやべえ。

休日のテーマパークかよ。

うっ、頭がつ……ジェットコースターはちゃんと身長制限を守る事で命を守るので、間違ってもシークレットブーツなんて履いて誤魔

化するんざいでの外だからまだまだ俺には早いや。だっ……  
しっかし。

さすが夏休み、の頭。こりやあと1週間もしたら街からもっと溢れるんじゃないか？

そしてまあまあ、チラチラチラチラ……視線が鬱陶しい。たまに「変態」とか「珍獣」だのボソボソ言ってんじやねえ聞こえてんだよ刺さってんだよ。あと一部の「同士か」って目はバツカやめろ一緒にすんなそれはそれとしてそっちの馬頭店で売ってるかな。

まず——半裸やめよ。

「ありがとうございますー」

「木こり1式か……見えなくも無いが」

店売りの一番安い防具、防具？ その辺を歩いてる男NPCの色違いを着てるような、同じ服のような。まあ初期装備よりかは防御高いし、なんでもいいや。

視線は、……まあそこそこ減ったか。

「なんで鳥頭なんだアイツ」だど？

やかましい。ネタじゃねえぞ。視界に補正効くのが中々便利で、ただの作業帽と比べると手放せなかったんだよつ。

なんだ1式ボーナスで「木を切る時の斧操作に補正ボーナス」って何得なんだつての。意味わからんわ。

「えーと確か待ち合わせ場所は」

メールメール……あった。

なにになに？ ファステイアのリスポーン地点の、街の中央広場の、広場から見て右手に進んだ、先を、左に曲がった所にある広場、つて。解りづらっつ！ 文面よつ。アイツたまにポンコツになるのなんなんだもつと目印らしいもんを教えてくれよつ！

というか、何だこの街広場いくつもあんのかよ。そういう特徴か？

迷うと思わないが、道の先なんて微塵も見えねえような、この人混みじゃ少し不安だな。

ピコンッ

「メール、つてまたアイツからか」  
なんだ催促メールか？

差出人：京極

宛先：楽郎

題名：着いた頃かな

内容：待ち合わせ場所、ファステイアは広場が多いし夏休みシーズンでも多くて迷うかもだけど、今から間違いないく街で一番騒がしくなるから、きつと分かりやすいよ  
どう伝えればいいのか文面に困るけど。ともかく、間違っても巻き込まれないでね？

「はっ。」

一番騒がしく「なる」？ 巻き込まれるな？

「どういう意味だ」

「こつちの広場でルテイアたんが出たぞーっ!! しかもサバさんとやり始めるぞっ、見逃すなーっ!!」

どこかで、プレイヤーが意味不明な事を大声で叫び始める。

それに俺と同じくポカンとする大多数の初期装備陣とは別に、その興奮した叫びに呼応するような雄叫びと一部黄色い歓声を上げたプレイヤー達が一斉に動き出して、

って跳んだ?! 屋根走り出してっ!?

「なんだなんだ」

なんでこいつらやたらと「動ける」んだ？ なんだあの、「始まりの街」にそぐわない機動力は。レベルがあからさまに、それこそ桁外れに開いてるとしか思えねえぞ。

「なるほっ。」

詳細はまるで分からないが。

なんにせよ、京ティメットの言う通り、確かに一番騒々しくなったかもな。

待ち合わせ場所はあの連中の向かった、あっちってことか。



歓声が高まり、熱気が籠もっていくファスティアのとある広場。

観衆に、2人の人影が囲まれ、その高速の攻防で砂煙を上げていた。

1人は両の手に持つトンファーエッジ以外、顔から足先までマントとローブ、マフラーで覆う賞金狩人というゲーム内NPC、ルティア。

対峙するは顔に傷ペイントをつけた、長躯の偉丈夫の如き屈強な女アバターを操る男プレイヤー、サバイバル。防具の一切を付けておらず、武具なのだろう鋼の籠手を身に付けるばかりではあった。

……この戦いの勝敗は決まりきっている。ゲーム内NPCルティアは、明らかにプレイヤーに勝てる調整をされていないのだ。さながらサバイバルの記憶にいる、ユニークモンスター墓守の某に近い理不尽な存在がルティアを始めとした賞金狩人達だ。

もつとも、そもそも彼女が<sup>ルティア</sup>現れた時点で負けてしまっていていい、主目的は達成された状況ではある。むしろ一部のプレイヤーは「何耐えてんだよサバさーん!!」と思っているほどだ。

だからからといって、サバイバルにとってそれはそれ。勝てない？ だからなんだ。

すぐさま両手を投げ出すような萎えた根性なぞ、サバイバルには微塵もなかった。

繰り出される黒い“点”による突き1つ。

振り回される黒い“線”の薙ぎ払い1つ。

変則二刀持ちとも言える、トンファーエッジを槍や剣のように振るう。合間合間に、頭になる美脚から放たれるは駒の如き蹴りの数々。

そのどれもが、鋭く、早く、重い。

ステータスを一極的に、それこそマツシブ<sup>S</sup>ダイナ<sup>T</sup>ナイト<sup>R</sup>の<sup>最適化</sup>ような重々しい一撃でこそはない。が、一撃マトモに食らえば瞬殺の気配の籠った攻勢だ。

マトモに食らえば、だ。



本命はこれらを起点にして、後に繰り出さんとする連撃であろう。箆手で受ける度、衝撃越しに伝わる言うなれば「熱」の、その冷め具合でハッキリと分かった。

「……おおっ！」

ならば反撃の択も当然取る。そもそも凌ぐばかりでいるのは、些か癪ではあるのだ。

ほぼ同時のような2連突きを避け、次いで振るい始めの上下のトンファーエッジを、背中と肩であえて受けるように踏み込む。

大剣スキルの中にある繋ぎの技、タツクル攻撃のスキルにより受けた2撃の威力を極限まで抑えつつも、勢いをつけてぶつかるとっ！

ルティアを確かにそれは捉え、宙へと押し上げるように僅かに浮かせた。

そこへ、タツクルのために踏み込んだ脚を軸に、放ち慣れた回し蹴り！

最上位職業【戦王】を取るまでに至ったサバイバルの回し蹴り。咄嗟に両の手に持つトンファーエッジの柄で蹴りそのものが防がれて。

サバイバルが瞠目する。

どのようなスキルか、それとも単なる技術か。ルティアは蹴りの衝撃を殺し切り、優しく放られるように上へと跳んだ。

足を伸ばしきった体勢のまま、頭上を取られたサバイバル。

その頭を叩き落とすべく、中空でトンファーエッジを構えていくルティア。

そこへ！

「おおっ！」

無理矢理な姿勢で、サバイバルが自ら跳び込んだ。

そこはトンファーエッジの最大威力を殺せる至近距離。振るったところで痛打に至らぬと、ならばとルティアは得物を留めて、その巧みな蹴りで迎え撃とうと動く。

それよりも！

サバイバルの身に深く沁みたその得意技が放たれる方が、僅かに

早かったつ。

滅茶苦茶な体勢から、されど、ルティアの顎目掛けて的確に力カト蹴りが放たれた。

——彼は壮絶な痛みを伴うとある孤島ゲームにおける攻防で、上空からの奇襲に対し、対空ハイキックによる迎撃を得意としていた。それは幾多の曲者の顎を的確に力カトで砕く事で一撃に仕留めた、サバイバルならぬバイバアルの妙技である。なお現実におけるカウントは枚挙に暇がないので割愛する。

寸での差で迫る蹴撃。それも人体の急所狙い！

堪らずルティアは、しかしそれすらも防御する。

だが今度こそ、その衝撃をマトモに受けてその体が傍目は撓むようにしなり、弾けるように飛ばされた。

「わたった」

「ちようお」

吹き飛んでくるルティアから、人混みが波打つように逃げる。生まれたその荒波の間を、二転三転と転がって。

勢いを抑えきり、軽やかにルティアは降り立った。

ダメージはさほども無い。

開いた距離を詰めるべくルティアが駆け出す。

腰を落とし、不敵な笑みを浮かべたサバイバアルが迎え撃つように手を広げる。

「さすがだサバさんあのルティアたんにかマすなんて！」

「なんてことをつつ!! ルティアたん!! 無事か——！」

「コイツ! ってかどう見てもあれ無事だろ」

「サバさんを責めようってか? ん? 暗いところ行く?」

「あゝあゝ? ルティアたんを心配して何が悪い??」

「過激派と過激派だ逃げろっ」

防戦一方だったサバイバアルの明確な反撃に周囲が湧いた。もつとも、集中する2人にそれは聞こえないまま、さしたる間もなく再び接敵する。

大きく吹き飛ばされたルティアは、しかし変わらず淡々とした在り

様だった。

殺意は感じるが、やはり「熱」はなく。

ならばと、サバイバルが仕掛けた。

「使っていくぜ」

戦闘開始の焼き直しにはしないとはかりに、スキルを切る。

攻撃力だけではなく、機動力、耐久力、技量。

前線を貼るに相応しいスキルを次々と起動していく。

戦意を漲らせるサバイバルに対して、ルティアはさしたる警戒の色も見せずに攻め入った。

トンファアーエツジも蹴り技も、全てに虚実を織り交ぜた連撃。攻撃後のサバイバルの立ち位置までも計算しつくされたそれは、確かに早い。

やはり鋭い。

そして重い、

「はっはーっ！」

「……っ」

だが！

こうやって、受け止めてしまえる程度には、本命でもないこれら起点の攻撃は「弱い」っ！

両の手共に叩きつけんと振るったトンファアーエツジをサバイバルは渾身で掴まえた。

反射的に引き抜かんとするルティア、刹那、その力を利用して沈み込むようにサバイバルが懐へ潜る。

サバイバルが腹部に頭突きのようなタックルを入れる、寸前、ルティアの膝が懐に迫る不埒者の顎をがち割らんと跳ね上がる。

——読み通りっ！

サバイバルの口角が上がる。驚異的な反射で反撃が来るだろう、とアタリをつけていた通りだった。

その脚をこそ狙われていたと気付いた時には、ルティアの視界が回っていた。

跳ね上がってきたルティアの膝を、その足を、しかと両の手に捉え

て抱えるようにし、サバイバルが軽く跳んで身を捻ったのだ。

空中でルティアの脚を抱えたまま、地面にこのまま倒れようものなら完全にその脚をキメる腹積もりのサバイバル。

何をされたのか分かったがどんな技なのか分からないルティアはしかし、このままでは脚を持つていかれる危険性を察した。

トンファーエッジが2つ共閃き、石床を粉碎して地面へと突き立った。

そしてすかさず回転するっ。

「ぬ、おあつ!？」

サバイバルを脚に引っ付けたまま、トンファーエッジを起点にして逆立ちのような体勢でルティアが風を巻いていく。

瞬く間に、魔法のような旋風を巻いた。

石片が多数飛び散る。周囲の観客から悲鳴が上がる。

回り出した瞬間に脚を捻り壊そうとしたが、あまりの勢いに力が入れるどころではないサバイバルは、次いで直感に従い、もはやしがみついていた脚を離れた。

慣性に従い吹き飛ばるように落ちるも、吹き荒ぶ石片から顔を守りつつ中空で体勢を整え着地する、直後。

遠心力を多大に載せ振り下ろされたルティアの脚が轟音を起こし、土煙を立ち昇らせた。

あと半秒離れるのが遅れたらどうなっていたのやら、と、サバイバルは考えて笑った。

「こっわ……—む」

淡い粉塵が立ち込める最中、サバイバルは確かにその眼差しを感じ取った。

肌を焼くようなそれ。お前を殺すと宣告するかの如きそれは、——求めていた「熱」だ。

フードとマフラーの隙間から微かに、サファイアに似た双眸が滾るように輝いているっ。

何かしらのスキルエフェクト……!!

そう理解すると共に警戒レベルを最大値まで引き上げ、防御系スキ

ルを幾多と発動する。

——備えやよしつ。未だ何をしてんのか知らねえが。来てみなル  
ティアたん、今日こそあつ……!」

次の瞬間には、サバイバルの身体は両断されていた。

………

「……まさに追加戦士っ! くくく、我が事ながら恐ろしい、いや本当に恐ろしいのは着こなすルティアたんこそ、か」

着せ替え隊が御用達にしている、フアステイアにある【蛇の林檎】店内にて、サバイバルは恍惚としていた。

次々と届けられる同士達からのルティアの盗撮<sup>スクショ</sup>。その姿はフードこそ被って顔は見えないが、……胸に大きなリボンを着けた赤と黒を基調とするフリルの多めのジャケットと黒いスカート姿となっている。

どこかの特撮物に出てきそうな魔法少女、あるいは美少女戦士的な衣装に身を包んでいるルティアを、しばらくの間、様々な角度から撮られた画像群を一頻り眺めて。

「うーむ。やっぱ視界補正系とる、とすつとレベルダウンしねえとー、や、でもそこまですんのもなかなかあ……」

PVPを手段とする克蘭「ティーアスたんを着せ替え隊」において、時間切れ、と認識されているルティアの何かしらのスキル。いかに戦闘を続けようとも、彼女のあの目が輝いた直後には須らく真つ二つにされてしまう。

サバイバルは、いったい何されてんだあの時、とぼんやりグラスを傾けていた。

なお、キルされたばかりで所持金はもはやない。飲んでるそれは、リアル志向の徹底的なシャングリラ・フロンティアならではの、顔馴染み故のツケであった。

「いたいた。やっぱりここてくだ巻いてる」

「んあー？　なんでえ、まだいたのかよ京極。待ち人、待たなくていいのか？」

馴染みのある声に振り向く。

和装に太刀を佩いた女侍といった様相のプレイヤー、京極、その『極』の読みは『アルティメット』という中々奇抜なプレイヤーネームの女性がそこにいた。かつてサバイバルが所属していたPK専門の克蘭【阿修羅会】の同輩である。

待ち人とやらと遊ぶためにカルマ値を精算してまで今日に備えていた、と。待ちぼうけてる京極を見付けてそんな話を聞いたのだが。

「ああ、それなら」

「悪いな京ティメット、1つ聞きたかっただけなんだ」

その問に対する返答はなかった。京極を京ティメットと親しげに略し、その後ろからぬつと二人の間にクチバシから割り込んできた見慣れぬ輩にサバイバルは眉をしかめ、そのプレイヤーネームを見て――目を見開いていった。

指は自然と、顔につけた傷ペイントに触れていた。

そこに秘めた、冷めぬ「熱」を思い出した。

今でこそアトバードとの再会があつて、サバイバルの中では1つ落ち着いた所はあつた。だが……不意に、有りもしない傷を夢にまで見て臍を噛むのだ。VRゴーグルを睨めつけて、次いでそのソフトを起動して。

ただただずっと、日がな一日。

全てが閉じられた孤島に立つこともしばしばある。

もう会うことはないと思っていた。

会おうとして会えるものではないと。

会ったところでどうすると己を自嘲したこともある。

「はじめましてサバイバル。ナイスファイトだった。

で、だ。一個だけ聞かせて欲しい事があるんだ。それが聞けたら俺はとつととここを出るからさ」

だが、確かに今、あの熱を感じる。

その眼差しに、その中に籠もったあの「熱」を感じる！

コイツだ……！ コイツだっ!!

「俺は「ム鯖」のサンラクだ。」

お前は「ゆ鯖」のバイバルか？」

「——ツマツジかよ、おい……っ！」

それから数秘後、蛇の林檎を震わせるくらいの哄笑が響いた。

## 京のクソゲーマー2 距離感

跳梁跋扈の森を京ティメットとのんびり歩く。

さすがにヴォーパルパニーが出たら多少集中するが、それ以外はもはや雑魚。京ティメットにいたってはレベルカンストしてるからコイツもコイツで暇を持て余す。

雑談しながらの気楽な道中だ。

「サクサクだね。ま、サンラクにとってはここじゃこんなもんだろうけど。……ねえ、結局あのサバイバルと仲良い理由って別ゲーで繋がりがあったからってこと？」

「まあそんな感じ。というかなんだその、あのサバイバルって言い方は。アイツなに、シャンフロでもなんかやってるのか？」

「謂れは知らないけどタイムマン無敵って呼ばれてたりするよ」

「ぶっほっ。つぶ、ふふーん？ そのへんもっと早く知ってたら本人に直接聞くところだったな、くく。」

「……タイムマン無敵ねえ。なるほどなあ」

分からないでもない。ステータス差を埋めたところで、よーいどん、でやり合ったならそうそう勝てない予感はある。

そもあの鯖癌で正面からアイツと渡り合えるやつは、さて何人いた事やら。俺が完全に不意を打つても3度に1度はあの蹴りで仕留められた。念には念を入れてそれでも咄嗟に反応されるんだよなあアイツには。

バイバイアルの対人というか、戦闘勘は尋常ならざるものがある。

それこそ、今は亡き富嶽のじいさまとも案外いいとこまでやり合えそうなんじゃ、と考えてしまいうくらいに。口にしようものなら京極がまるで限界オタクと化して面倒だから間違っても言わないが。

「ねえ。ところでいま、シャンフロでも」って言ってたけど、それについて話す気はないの？」

「あ、この道中もそうだが最初に言っとくけどボス戦でも絶対手え出すなよ。」



元々そんな気はなかったが尚更だ。なにせアイツラがいるとわかった以上、1度でも介護されようものならこの先シャンフロやつてる間、ずっと何言われるかわかったもんじゃねえからな」

「どーせ必要ないでしょっ。……なんだい、はぐらかしてさ。ふんっ」  
拗ねたか。まあこればかりは、鯖癌についてはおいそれと話せない。

内容がちよつと、いくら刺激が強いからなあ。  
仕方ねえ。

「今度の道場が休みの日、あけとくよ。何にも予定入れないで。何がしたいか決まったら連絡くれ」

「……ふーん？　ま、考えておくよ」

「おう。よろしく」

素っ気ねえ返事だけど、口元がニヤついてるあたりわかりやすいなお前ほんと。

よしよし——いよつつつつっ！！

拗ねた京極は修羅と化した國綱さんを喚び、泣いた京極は羅刹へ変じた國綱さんを喚ぶ。道場の皆はこれを修羅綱、羅刹綱と呼んでいてなお極稀にその上が——

「——ボスカ」

「ねえ。煽られるのは癪としてもバツサリやって次に行っちゃわない？　僕ヒマなんだけど」

「ヒマにするのは悪いとは思う。けどその時その時の俺が仕留めないと面白くないんだよ。」

「けど安心しろ、退屈はさせねえさ。見逃すなよ京ティメット？」

「へえ。じゃ、期待してるよサンラク」

おうさ。

正面へと、その前へと進み出れば、プレイヤー1人容易く丸呑みにできそうな大口を開けて威嚇される。

が、だからどうした。

さあ貪食の大蛇さんよ。あそこに控えた俺の相棒が暇しないよう、なるだけ派手に踊ってもらおうか！

.....

くあああああ——っ!!

「っ……た、確かに、退屈しなかつ、つぶくく……!」

「ええいなんだ糞攻撃って! 毒糞って!」

「ぷふふっ。く、クソゲーハンターらしくって、いいんじゃない?」

「そこを掛けるなっ」

クソゲーのクソはあくまで比喩だっ。

うええ気持ち悪っ。ってしまった俺回復アイテム、

「あ、はい。これ解毒薬とあと回復POT。どうせ用意してないでしよ。このくらいの手助けは構わないよね?」

ぐ。

いや。

でも。

………たしかに?

しかし……。

「………、………っ………たすかる」

「葛藤しすぎでしよ。あ、待った近づかないで。ここ置いとくから」

「ゲームだぞ」

「身綺麗ならともかく、そんな有り様の君にはあんまり近付かれたくないよ。いくらゲーム内でもね」

へいへい。

「ちゃんと洗ってからならい……っだっって」

「あん?」

なんだ口籠って。んー解毒薬のメント感よ。そういやライオットブラッド・アンデッドも確かこんな味だったか。今家にあつたかな……。

「——とつととシャワーくらい浴びてくれないと汚くって仕方ないなっって話だよっ」

「わかったわかった。ふーん、シャンプーってシャワーあんのか」

「え……、——っ」

回復POTをパキンツと。おお一気に体力全快。これ、絶対後半の街で買う類のだ。贅沢なこととしてんな俺。今後はちゃんと薬草とかも準備しねえと。

って、おお、よく見りやレベル2つ上がってるな。ボスソロ討伐はやはり経験値がうまかった。ステータスポイント、……今は止めとくか。

まず京ティメットの言う通り宿屋にいつて、セーブがてらゲーム内のシャワーでも浴びて落ち着いてからに——

「……ん？」

シャワー？ とするとインナー着けたままになる訳だよな、倫理的に。

ただそれ、このリアリティで？ 存在してる方がより現実的だが、プレイヤーが使えるとしたら逆にそういう制限のせいで違和感に繋がるような要素だな。

はて。

「なあ京ティメツ、てあれ？ おおーいつ！」

京ティメットのやつ、いつの間にか随分と離れて森をほぼ抜けて吊橋手前にいやがる。

なんなんだ急にどうした？

ともかく急いで追い付くか、ってどうして俺が走り出したらおまえも走るんだよおいつ！

「スタミナもAGIも違いすぎてまるで追いつけんっ」

ただ俺を完全に置いてくつもりはないらしいな。チラチラと振り返っては距離を保ちつつ俺からギリギリ見える位置取り。

いやお前ながしたい。置いてくなら置いてけ、そして止まるなら止まれ。追いかけてっこんなぞ俺は望んじやいねえぞ！

結局セカンデイルの宿屋まで、付かず離れず、声が絶妙に届かない、そんな距離を維持されて。よくわからん追いかけてっこをするハメになるとは……。

先に宿屋に入った京ティメツを追いかけるように俺も入り込む

も、やはりというかヤツの姿はない。

ひとまず部屋を取って、セーブして、と。

……なんだったんだいったい京ティメットのやつ。

「あれ、ログアウトしてる?」

フレンドリストには暗く浮かぶ【京極】というプレイヤーネーム。

おいおい、ん? メールだ。

「急用思い出したから落ちます、ねえ。ふーん?」

……約束のこと忘れないで、ともある辺り。怒ってる訳じゃない、か?」

ふーむ。まあいいか。

まだ始めたてのプレイヤーに付き合うのもそら暇にもなるだろ。

気持ち早く、とつととレベル上げて進めるか。

それはそれとして自身の強化には素材も金も要る。

「採掘が素材と金策にちょうどいいんだったか」

ピッケル買って行ってみるか。

しかし……何か忘れてるような?

なんだっけ。まあ忘れてる位だし、いいか。

## 京のクソゲーマー3 クソゲーフレズ

「へー。生粋のクソゲーマーが神ゲーのシャンフロを、それも同級生のあの子と、ねえ」

「なんだよ何が言いたい」

バンダナで目元は見えねえが、口元も声もニヤついてんだよモドルカツオめ。

「1回だけここで君等の雰囲気見たただけだけど、仲いいよねほんとして。しかしそっか、そんなにハマってるとはね、あのサンラクが」

「おう。癩だけど、リユカオーンっていう最強種のモンスターに惨敗したのが割とな。少なくとも、あんのクソ強な狼を倒すまではやり続けるつもりだよ」

……誰も知らないユニーク、致命兎叙事詩に遭遇できたのはヤツのおかげでもあるがそれはそれだ。

面倒な呪いを植え付けてくれたお礼に、いつか完膚なきまでにブチのめす！

「おお、おお。燃えてるなあ。そうか、サンラクがそこまで本気でやるのか。んじや俺もやろうかな、シャンフロ。鉛筆にもメールしとくか」

「え、アイツやってんの？」

「らしいよ？ どの程度やり込んでるかは知らないけどさ」

地雷ばら撒かれてるような不穏な気配が一気にしてくるな、鉛筆がシャンフロやってるなんて聞くと。

しかし、カツオもシャンフロ始めるのか。まあでも、やるタイミングと時間がないってシャンフロ発売当初、そんな雑談をここ【便秘】でしたっけな。本業の合間にココにインしてる辺りコイツも大概だったが。

カツオ、日本トップクラスのプログラマー魚臣慧がシャンフロにね。

——もし、もしも。

カツツオがアイツとやり合うとしたら？

まあさすがに格ゲー最強らしいカツツオ有利か、いやステータスに左右されるから分からないが。

……待て。そもそもそんな事になんてなる。

いかん。思考が龍宮院に、國綱さんに影響されてる気がする。

「なんだい黙って。あの子との約束の時間忘れてたとか？」

「90スレも迎えて減速どころか加速してるんだって？」

雰囲気が一気に沈んだな。良い様だ愚か者め。京極が話題に出ると毎度ニヤニヤニヤニヤと、いい加減そのいじりにはカウンターしてやろうと思ってたんだ。

「考え事というか、お前がシャンフロやるっていうならそのうち顔合わせすることもあるかな、ってフレがいてさ」

無言で小さく頷くだけで続きを促すのは構わねえが、とりあえずその澱んだ空気は直せよ。

「格ゲーじゃないが、対人要素もある別ゲーの縁でな。シャンフロでも、タイマン無敵、なんて呼ばれて結構有名人らしいのがなかなか笑えたけど。

そう呼ばれても納得出来る位にやるやつだよ」

「へー……——へえ？ プレイヤー人口マンモスの、あのシャンフロで。しかもサンラクにそこまで言わせる位にマジなヤツか。

いいね。増々やる気になってきた。楽しみだよソイツに会おうの」



「でー？ どうだったの京極ちゃん。例の人とは」

洞窟が遠目に見える茂みの中にて。

ペンシルゴンがニマリと尋ねて、京極の動きが固まった。

カルマ値を精算した京極と金策でプレイヤー相手はできず、ならばとアセンションホーン狩りという極々暇を持て余す作業中。必ずこの場面が来るだろうなと身構えていたが。

京極が内心を隠さず顔に出すと、ペンシルゴンはより楽しげにニコ

ニコとした。

「……」

「無視とは酷い。なんだよう、『なるべくアイテムもマーニも失わずにカルマ値精算したい。どうしてもできるだけ傍で手伝いたい、シャンフロ始めるっていう、その、そいつ僕の好きな人でその』つなーんて！ あんまりにもいじらしく可愛らしく言うからせつかくひと肌ぬい」

「——だ、だれがつ！ そそそんなこと言っていないよ?! 勝手な事言うとのあの、ええともうたたつ斬るよっ!？」

「あつれPKK? 誰のおかげで、ローリスクで身綺麗になれたのかなあ? うーん薄情者だなあ京極ちゃんってば」

「こうぞう、よくないっ」

「そうだね。でもだいたい似たような事は言ってたよね」

「……っ」

改めて。

この元同克蘭【阿修羅会】のアーサー・ペンシルゴンにとんでもない借りを作ってしまったと、両手で熱くなってきた顔を覆う。

「す……す……き、とかっ、そうじゃないとかはともかくっ。まあ、うん。ファステイアで無事合流できたよ。……今日もこのあとサードレマで待ち合わせ」

「そう。ふむふむ。あれ? セカンディルは? 難所のマッドデイグはいいのほつといて」

ファステイアの次はセカンディル。サードレマはその先、四駆八駆の沼荒野のボスを倒すしか行く術はなく。

ファステイアからそのまま進むには難所であろう、マッドデイグとソロ殺しに挑むのは大丈夫なのか?

赤みの薄れた京極の顔に、微かな笑みが浮かんだ。

「今日は君との約束があったし、借りの精算優先かなって。

それにまあ、大丈夫じゃないかな。あいつ自身の腕もあるし、完全にソロならともかく、なんだか結構強いNPCと一緒にしいし?」

「ふーん? どうにかできそうな目処はあるんだ、なら……んん?

「ごめんよクランチャットだ」

どうぞと身振りで京極が促し、ペンシルゴンがウィンドウを開いた。

数分。

京極がアセンションホーンがもうそろそろ現れそうな時間が近くなってきたなとリスポーン地点の洞窟を見詰めていたら、隣のペンシルゴンが軽くため息を吐いた。

ウィンドウを閉じたペンシルゴンが視線に気付き肩をすくめる。

その辟易とした様子から察するに。

「相手はオルスロットかな。なんだって？」

「正解。サードレマに行けるか、だって。文字を打つのも煩わしいの知らないけど、詳細は現地で聞いて欲しいとか。何人かオンしてるっぽいし、その辺の連中から聞けって事なのかもね。」

「やれやれアイツは。今度はどんなクダラナイ事させる気なのやら」賞金狩人という凄腕のNPCが実装されて何人ものクランメンバーが何度となくキルされて以来、PKに科せられる重いデスペナを完全に無視できなくなった今の阿修羅会は安全を求め始めた。大々に暴れることはめつきりなくなり、ソロやペアのような少数のパーティをコッソリつけて袋叩きにするような、小狡い事を喜々としてする始末。

それは、正面切つての対人をこそ好む京極やサバイバルのようなPvPガチ勢から言ってしまうえば、腑抜けになったと言えて。ペンシルゴンとて思うままにできない現状が窮屈で仕方ない様子だった。

「いつそ僕みたいに抜けちゃえば？」とは、ペンシルゴン個人があユニークへ拘っていると何となく察してる以上、軽々しく言えず。京極としては同情的な目線を送ることしかできない。

「抜けちゃった僕としては、なんとも大変だね君も、としか言えないや。」

しかしサードレマなら、そろそろもう一頭出てくる頃だし、そいつを倒したら一緒に行こうか？ それとも今すぐ行くかい？」

「そうだねえ。その方がキリもいいし」



とりあえず。アセンションホーンをもう一頭倒してからサードレマまで一緒に行く運びとなった。

……………ただ

「??」

ペンシルゴンと別れたサードレマの門前に、しばらくしてから京極は戻ってきた。待ち合わせの時間になっても連絡1つないサンラクを、どうせなら門で待つかと訪れたのだ。

そして、ただ困惑した。

ペンシルゴンが「SF Zoo」の克蘭リーダー、

「Animalia」と戦ってるのはまだ良しとした。だが——なぜに京極の待ち人、サンラクが阿修羅会の面々に追い回されているのかは全く推し量れなかった。

何やら肩に兎を1羽貼り付けている。ヴォーパルバニーの亜種か何かか、着飾っているのが伺える。あれがもしや話に出たNPCだろうか。

詳細をボカしていたのは、京極を驚かしてからかうつもりだったに違いない、やつならそうする。同じ立場なら京極とてやった。

しかし、そんなことはもはや瑣末事、今はどうでもいい。

楽郎が遅れた理由は、実は楽しみにしていた、ささやかな2人の時間を割いた原因が、何か。

それがこうして明白であれば、京極がする事はただ1つ。

「ねえ」

声掛け1つ。

踏み込み1つ。

「は——が、腹がつ!？」

背面から一突き。鎧の隙間をスルリと通し、クリティカルヒットの一撃を見舞い即座に引き抜く。

現実なら致命傷、だがこれはゲーム。

死には至らぬ急襲の一撃、その怯み事、払うように大剣が振り被ら

れる。

「つ、つの、だれだこんちくし」

京極に刺されたプレイヤー「ケツチャム」が後方を、その大剣で薙ぎつつ振り返る——その首元へ。

下顎へ、一直線に。

難なく大剣を掻い潜り、躊躇なく突きを放ち、脳天を穿ち。

数秒の硬直を経て、パリン……と。まず1人、京極は切り捨てた。

「なん、——つて京極じゃねえか!？」

「何すんのさいきなり現れて!」

「てつめどういうつ」

憤りに任せて踏み込んできた1人に向け、刀を振るう。

「りも……、?」

【ブランチ】の頭部が宙へと舞い反転していた。その表情が怒りから驚きに変じて固まり、次いで砕ける。

スキル【居合・椿】……部位を落とす事に特化した剣閃。肘に当てればそこから指先までを欠損させ、武器に当てればその耐久値を大幅に削り時に破壊すらする。

急所たる首に当てれば無論、容易にそこを斬り落とす。

そうして。また1人が一步、京極の間合いに踏み込んだだけでその瞬間キルされて。

遅まきに、ようやく京極の本気を悟った残りのPK2人が身構える。

「どういうつもりだつて? 僕のセリフなんだよね、それ」

京極とて、襲われていたのがどこぞの誰かなら捨て置いた。

顔見知りなら合掌くらいはした。

ただのフレンドなら声援を送るなり煽るなりした。

だが。

今日、この時、この場所で。

彼に手を出すならいかに見知った面々と言えど、その首に向けて鯉口を切るに迷いは不要。

「ドロップ品は返すよ。その位の義理はあるから。とりあえず、今は

ペンシルゴンだけ残ればいいよ」

だから意義は斬って捨てる、と。

刀を鳴らして京極は一步、また一步。ゆらり……残る2人へと歩み寄る。

………

「さ、サンラクサン後ろですわっ」

「ん？ ああたぶん大丈夫さエムル。

ようペンシルゴン、京ティメットのやつはまずお前に用があるみただが、先にあっちに行かなくていいのか？ んん？」

「あつはっはー。虎の威を借る狐ならぬハシビロコウかな？ 手が疼いちやうからその顔ヤメてよねっ。

……確認なんだけど。さっきサンラクくんが、約束の時間なんでな、って言ってたけど、その約束してた相手って京極ちゃんであつてるっ。」

「おう。あー、そうだな、カツツオもシャンフロ始めるみたいだしこの際言つとくか。

京ティメットと俺はリアルで繋がりのある——まあゲーム友達みたいな関係だ。たぶんシャンフロもちよいちよい一緒にやる予定」

「へー！ 私京極ちゃんとは、元と付くけど同じクラン同士だよ。いやはや世間は狭いねえ。

ふむふむ、となるとカツツオくんも君等のことを知っていると——なるほどね。

サンラクくん、君とカツツオくん宛にこのあとメールしとくから、京極ちゃんには君から伝言よろしく」

「うん？ まあいいけど、シャンフロでなんかやるつてののか？」

「詳細は後でね。まあ……大きなお話になるかな」

「だろいなあ。俺とカツツオをわざわざ駆り出したってんならそれなりと見た。なら内容次第だろうけど、可能なら提案が1つある。

サバイバル……元同じクランだろ？ アイツにも声掛けられる

ならかけて欲しい。アイツとは、”お互いタノシイ事には呼ぼうぜ”  
”って話をしたばかりでな”  
「わーお、そこともかあ。なんとまあ。——考えておくれよ」

## 京のクソゲーマー3. 5 元PKの生粋のPK

——京極がものの数分で、4人の元同クランの面々を斬り捨てて。事情を聞こうと見渡すも、サンラクと何やらオマケが残るばかり。倒れ伏したまま何やら呻いてサンラクを引き留めようとしているAnimaliaについては、呼ばれる本人が素知らぬ顔なので京極とて気に留める事はなかった。

そう、彼女の事はどうでも良かったのだが……

「っ……やっぱり逃げたか」

この事態がなぜ起きたかよく知っているだろうペンシルゴンはおらず。京極は、苛立ちに任せて舌打った。

話を聞きたかったのもあるがそれはそれとして、連中を始末してる最中ちらりと見えた、

京極の、

待ち人の、

サンラク、

といやに、やたらに、親しげな様子だったのが頭にき……いや鼻につ……単に疑問が尽きないからそのヤケに近い距離感でいる事についてハツツキリとさせたかったのだが。

居ないなら仕方ない。が、必ず、あとですこーしばかり文句を伝えようと心に留めた。果たし状の内容はさて……

「サンラクさんのお友達なんですわ!! 初めまして、あたしはエムルですわ!」

「くひゃあっっ!?!」

足元からの跳ねるような声に京極は軽く跳び上がった。

……まさか、あの“ヴォーパルバニー”から“言葉”で挨拶されるとは、夢にも思わない出来事であった。

京極から見て、サンラクは確かに目立つ部類のゲーマーだ。だがそれは、

『ネフィリム・ホロウ』

『辻斬・狂想曲：オンライン』

『ベルセルク・オンライン・パッション』

……といったマイナーなゲーム群においてのトッププレイヤー達、上層ティアーに食らいつける位やり込んでいたりするからであり。シャンフロにおいては始め立ての新規プレイヤーに過ぎない。だどいうのに阿修羅会に狙われたその理由は、つまり……

「あ、あー、うん？ よろしくね？ ……サンラク、昨日パーティーメンバーになったやたら強いNPCって」

「おう。このエムルさんのことですよ」

「ああー。サンラクさんまーた真似っ子ですよ！」

サンラクがケラケラと、エムルなるヴォーパルバニーがポンポンとじゃれあうその光景に。

これはシャングリラ・フロンティアが始まってここ約1年、誰も見たことがないユニークシナリオであると。だからこそ阿修羅会も、サブリーダーであるペンシルゴンまで動員して、サンラクを狙ったのかと京極は察した。

「ヴォーパルバニー」。『街』を除くほぼ全てのエリアに現れては、その兎ならではの矮躯と俊敏性を活かしてプレイヤーを翻弄しその首を狙うという、稀に現れる事からレアに区分されるエネミー。それでも、ただのモンスターであるはずなのだ。

だが、今こうして京極の目の前にいるエムルと名乗ったヴォーパルバニーはといえば。

青を基調とした魔術師のような衣服と帽子。雪のように真っ白でフサフサとした毛並みが揃う小さな両の手が袖から伸び、その兎ならではの短躯よりも一回りほど小さくしかし、分厚い本を抱えている。ピクピクと動く小鼻にちよこんと乗った丸メガネ、そこから覗くは円ちんぽな紅い瞳。コミカルな言動も相まって愛嬌に溢れている……京極もよく知るヴォーパルバニーは、その愛らしい見た目と裏腹な、物々しい武器を振るっていたのだが。

このエムルとは似ても似つかない……

「いつまでも門前にいるのみな。細かい自己紹介は後にしようぜ」

サンラクに言われるままサードレマの街に入ってみれば、多々様々なプレイヤーに知れ渡っている事を実感した。

視線、視線、視線……浴びる様な視線の数々は、そこかしこから向けられるプレイヤーからのもの。それらは全てサンラクと、その肩に掴まるエムルなるヴォーパルバニーに向けられているのが傍にいる京極とて分かるほどの「圧」があった。

「エネミーのヴォーパルバニーがなぜ街中に？」といった疑念や好奇、初心者森で首を刎ねられでもしたトラウマからか引き攣るような表情も確かにあった。だが分かりやすく「いたーっ！」と声を上げる者達、探し求めているモノを見つけた興奮の表情が大半だ。

後者の興奮したようなプレイヤーが大挙して、囲うように動き出す。軽く怯んだサンラクが振り返って申し訳無さそうに口を開こうとする直前に、そつとその肩を押し留めて京極が前に出た。

「ん？ うげえっ!？」

「アイツは……!!」

走り寄る勢いが大きく緩んだ。そして次第に、離れた位置で止まった者もいれば、中には諦めたように踵を返す者もいた。

『京極』だ……ざわめきが門前広場に広がっていった。

苛立ったかのような舌打ちが聞こえた。

苦々しい顔を隠さず睨んで来る者もいた。

刀を佩いた和装の女プレイヤー『京極』。シヤングリラ・フロントイアを数ヶ月もプレイしていれば、その容姿と名は誰からともなく耳に入る。

あのPK克蘭【阿修羅会】のキルスコアトップ3ともなれば、その悪名はシャンフロプレイヤーの大半に知れている。

PKである京極を知る者達が、不用意に近づけず、かと言って離れるのもと俊巡し、様子を窺うのか遠巻きに立ち止まっていく中で。

「あれあれ？ ちよつとどしたん？」

「怯むなよ街中じゃねえか」

「そうそう。それによく見ろよ」

一方、極々少数の京極を知らない者や、京極のキャラネームがレッ

ドネームでないこと、街中であることから強気に近づくと者達もいた。全員が足を止めることはなかった。自身の悪名に人払いを期待した京極からすれば、想定よりも乏しい様にため息が出た。

レッドネームでは最早ない。もつとも、キルされた訳ではないが。近付いて来ようとするプレイヤー達のその装備を見るに、いずれも序盤の街サードレマにいるには違和感しかない、高レベルの物と見受けられた。

けれども、良くも悪くも対人に特化している京極からすれば、一人誰を見ても、斬り捨てるに数分とかかると思えなかった。かと言ってそれをしては、中々の苦勞を重ねてカルマ値を清算し、身綺麗になったばかりのあの苦勞が水の泡になる。

「やれやれ」

だからここは仕方ない。癩だが打つ手もなく、どこの誰ともしれない人の波に大人しく揉まれるか……

「はい、そこまで」

なんて、冗談にもならない。

幾閃、刃が奔った。

京極達へと近づく足が止められる。瞬きの間で足元に斬撃が迸り、刻まれ描かれた“線”を前にして思わず立ち止まったのだ。

驚愕が、彼らをその場に貼り付けにした。近づく間に、京極が刀に手をかけていたのは見えていたが、それがいつ抜き放たれたのかはまるで見えなかったのだ。

スキル効果か、ステータス差か。いかにしても明確な実力差を感じ取るには充分だった。

だが次第に我を取り戻した1人が、いきなりの事に抗議せんとその“線”を踏み越えようとした。

その矢先、

「——弓使い、シユート」。正確には魔法弓使いか」

唐突に、京極に刀を向けられて自身の獲物と名前とをハッキリ読み上げられ、目を白黒させて固まった。

「で、……錬金術師、ミリオームゲイン」、



鞭使い “アツほか×2”、

大斧使い “富夢想屋”、

双剣使いは、 “ぼりえちれん” ね」

次々と刀を向けては、向けた相手の装備と名前を読み上げていく。「悪いけど、彼とは僕が先約なんだ。どうしても話がしたい……なんて言われても困るんだよね。うん、とても困る」

ついと、彼らの足元に刀を向けて。ゆらゆらと、石畳に刻んだ線に沿うよう左へ右へと何度となく揺らす。

「まあどうしても？ いや、どうなつてもかな？ うん。今後、僕やあのクランと……どういう関係になつてもいいから今すぐ話がしたいなら、どうぞどうぞ——」

その線を踏み越えろ。

その顔は忘れない。

いつかどこかで……

京極の言葉に言い返すような、それでもと強行するようなプレイヤーはその場にいなかった。

無言の人波を抜ければそこから先はつつがなく、サードレマの宿屋に、2人部屋に入ったのだった。

………

## 京のクソゲーマー4 メツセージ

「……あーあ」

虚しさに、京極は声を漏らした。

ここは【千紫万紅の樹海窟】、サードレマからフォスフォシエへと抜けるために通るエリア。蒸し暑く、粘りつくような甘い空気のある、ファンタジックな熱帯林である。

光る苔が群生していて洞窟内なのに何時だつて昼間のように明るく、何十メートルもあろう巨木や家ほど大きいキノコが群生し、色とりどりの大サイズの花々が咲き乱れ。そして、それらの陰には巨大な昆虫型エネミーが跋扈している。

しかし京極のように、現状実装されている中での最後の街ファイフテイシアまで到達し、それなりにシャングリラ・フロンティアをやり込んでいるようなプレイヤーからすればここは随分と過去に通っただけの道。そこかしこにチラチラ存在するエネミーは遥か格下だ。

だつていうのに何故そんな所にいるのかは、一重に。

現在進行形で攻略中であるサンラクと一緒にいたいがために、なんてそんな本音は正直に言う訳もなく。「手伝い」と、苦しく称してついてきているからだつた。……本当の本音を言えば、サンラクと2人でサードレマの街中巡りがしたかつたのだが。

「……ま、あんなおっかけがいるようじゃね」

宿屋で2人（と1羽）でゲーム内掲示板を探った所、京極の想像よりも大事になっていたのだつた。

サンラクが発生させた誰も知らないヴォーパルバニーのユニーククエスト。そして、2箇所に着けられた夜襲のリユカオーンの呪い。

たまたませカンデイルで無断撮影という盗撮紛いのスクリーンショットをされ、それがゲーム内掲示板という衆目の目に挙げられ

て。

サンラクが“泥堀り”を仕留める最中、京極がペンシルゴンとサードレマで別れる頃、それらユニークを目当てにして。

すでに、シャンフロのトップ層は動き出していた。

『阿修羅会』だけではなかったのだ。トップクラスのクランたち、中でもあの『黒狼』からも捜索隊が組まれるほど事が大きくなっていて。思わずリアルからそのトップへと、抗議メールを送りたくなる衝動に耐えたり。

「はあ」

何度目かの溜め息である。もはやどここの街中もロクに歩けそうにないと言うのは想像に易かった。

「ついつい阿修羅会の名前もボカしてだけど使っちゃたし。あーあ。

なーんか色々裏目裏目になつてる気がする」

楽郎がシャンフロを始めるなら、初心者のサンラクの傍に着いて回るなら。阿修羅会の肩書きは邪魔であろうと。ちよつとした苦労を終えてあのクランを抜け、レッドネームも黒字に戻して。

さあいざ！ とシャンフロの世界を楽郎と楽しむ事を心待ちにしていた、のだが、コレである。

考え始めると憂鬱だ。派手な事ばかりする当人にいつそ怒りをぶつきたい、が、決してサンラクに非が無いだけにそれも違う。

……まあ、でも。

「さあさあどうなるようになる?! いかがですかエムルさん!!」

「えええつと?! も、もう決着がつきそうですわ!!」

「いやそうじゃなくてここは『まだ逆転の目はあるんじゃない』とか臭わすんだよ。盛り上げ所だぞ」

「……むみゆみゆーっ」

大木を1つ挟んだ茂みで、何やらエムルをからかって盛り上がるサンラク。

その楽しそうな、このゲームを楽しんでいるのが伝わる姿。

「く——ま、なんでもいっか」

小さく笑いが漏れて、ついでにモヤモヤとした気も抜けていた。

阿修羅会の名をちよつと利用した事や、こんな事ならいつそクランを抜けなくて良かったんじやとか、攻略にオススメのお店巡りを自然としてゲーム内デートしたかったとか。

もう、色々と良しとした。京極の描いていた楽郎との思い出作りは何も出来そうにない。けれど、1番見たかった姿をこうしてそばで見れた。

ならば、なんでもいいや、と。

浮かんだ微笑みはその無邪気な姿への慈しみ……と。

「ま、遅かれ早かれだったかもだし」

そもそも破天荒なプレイスタイルのサンラクだ。どういう形にせよ一般的な道中では、どうせなかっただろうと諦めにも似ていたが。

……それはそうと。

クアッドビートルをエンパイア・ビーの巣にぶつけて。現れた群れを撃滅したクアッドビートルへと、これみよがしにセリフをキメて対峙するサンラクにどことなく般若面姿の影を見つけた京極は、今度あつちで見付けたら一も二もなく“天誅”しようと思に決めた。

理由はないしそも要らない。だってそう、この心の動きはそういうものだ。なにせ天がやれと言っているから自然な事だ仕方ない仕方ない絶対やろう。

「けどあれを捉えるのはなあ。ほんとゲーム内だととんでもなくいい動きするんだから」

奇抜な動きでクアッドビートルの突進捌くサンラクを見て、1つ唸った。

手負いと言えどレアエネミーのクアッドビートル。むしろ追い詰められた事でか、その突撃の迫力は遠目にも増しているように見える。京極やサンラクのような近接物理特化キャラでは相手取るに難がある硬い外殻。プレイヤーより数倍ある体格でその硬度だ、ただ体当たりには用いるだけで破壊力があり。また、甲殻類ならではの鋭利な三本の角を高速で飛翔しながら振り回す。

近接職には如何にも取っ付きツライモンスターなのだが、——相手が悪い。

「おつかれー。手こずるかなと思っただけで、まさか蜜で隙を作つて的確に傷口を穿つ、なんてことサラツとするとはね……」

「あれのフレーバーテキストが如何にもって奴だったからな。それに結局あれもカブトムシみたいなものならまあ、見ての通りの案の定さ。伊達に普段から虫関係は見慣れちゃいねえよ。」

そんなことよりほら、京ティメットも見てくれよこれをよ!!」

うひよひよー!　なんて奇声をあげてエンパイアビー・クインを始めとした蜂の素材や、クアッドビートルの大量の素材を目の前にして喜ぶ半裸に、京極の口元も緩む。

結局のところ。

僕がこうしてここに居られるまでの苦労も知らないでさー、という想いもあるが。無理やりでも一緒に来てよかった、という喜びの方が大きかった。

……………

巨大な木の虚うろに縦横無尽と巣を巡らせ、サードレマからフォスフォシエへと向かうプレイヤーの行く手を阻むエリアボス。

その名は道化蜘蛛クラウンスパイダーという。

——道化蜘蛛……道化なんて2つ名が着いてようがまだ序盤の、それも蜘蛛のエリアボスなんだろ?　なあに蜘蛛だって分かってりや対処方なんざいくらでも思いつくしよーよゆー、ソロで狩ってくるからそこでお前ら見とけよ。

飄々とそんなセリフを吐いて1人、サンラクはエリアボス・クラウンスパイダーへと挑んでいって——蜘蛛糸を巧みに利用して追い詰めていく様に、京極は舌を巻いた。

要所要所に剣と投剣による攻撃だけでクラウンスパイダーを天井の巣から地上に追いやったばかりか、天井に吊るされたクラウンスパイダーの投擲攻撃などに用いられる岩や丸太を次々落としてダメー

ジを与えている。

そして、天井へと復帰しようとする系にも即座に気づいては対処し、エリアボスのクラウンスパイダーを地上に張り付けにしてはまたボスが使わずの投擲物を落とし、ダメージを重ねていく。

もはやどっちがこのエリアの主な<sup>ボス</sup>のかといった様相で、サンラクがエリアボスを攻め立てていた。

「負けないとは思っていたけど、まさかこうも一方的になるなんてね……うん？」

メッセージの着信音に気付いて。今見るか数秒悩んで。

「そーらそらそらそらどうしたどうしたあっ!!」

「ふれーふれー！ サンラクさんっ！」

全く負ける様子はないし良いか、とそちらを開いた。

件名『Re：さつきはどーもペンシルゴン♪』

本文『いやいやいやいや!! m待つてまってちちよつと待つて京極ちゃん！ さすがに出会い頭はいmは困るんだよね!? dからまづは話を聞いてね?! いやきつとさ———すがにあのあとサンラクくんから既に聞いているとは思うnだけ———』

「ふふふ」

サンラクが探索する最中、京極がアーサー・ペンシルゴンへと送った<sup>メッセージ</sup>果たし状への返信だった。

サンラクからは、鉛筆騎士、もといペンシルゴンは『ユナイトラウンズ』通称『世紀末円卓』なるゲーム……当然のようにクソゲーとしか言えない数々の設定のゲーム……にて知り合った、あの”便秘”で顔を合わせたカツツオタタキと同じ数年来のゲーム友達であるとは宿屋で聞いていた。

ちなみに”幕末”と五十歩百歩のゲーム内容に若干心惹かれる物もあつたがそれは置いておく。

京極の楽しみにしていたひと時を”やってくれた”事に色々、幸いサンラクにただただ着いて歩くだけで時間はあつたから、いっぱいいっばいに詰めて文章を綴った。主に文句で。

”まあ、きつと時間の問題だったからそれはいいとしてさーあ？

”なんて終わりに付け加えたあと、肝心な主訴を最後の2文字に込めた京極からアーサー・ペンシルゴンへのメッセージ。それはどうやら、あのふてぶてしい雰囲気をこうも崩すには足りたらしい。

所々支離滅裂なメッセージを一通り読んで溜飲を下ろす。……それにしても気になるのはペンシルゴンからのメッセージ、そのメの一文だが――

「あれ。どうしてサンラクさん降りて来ちゃったんですわ？」

ふと上がったエムルの驚いた声に目を向ければ、天井の巣から降りて地上でクラウンスパイダーと相対するサンラクが見えた。

何でわざわざ有利を捨てたのか……一方的過ぎてつまらないとも思ったのかな？ 考える京極の目線の先で、クラウンスパイダーが蜘蛛ならではの瞬発力でサンラクへと飛びかかっていく。

サンラクよりもゆうに数倍は大きい体だと言うのに、残像を見せるほど素早い動き。正面からあれほどの迫力で襲われたのなら、不慣れな、大抵のプレイヤーなら何も出来やしないだろう。

「うん。さすが」

無論のこと、京極の相方は大抵の括りにはない。

クラウンスパイダーが、交差の瞬間サンラクによって頭部をカチ割られて。それがトドメとなり無数のポリゴンへと四散していった。

「どうよエムル、京極。宣言通りの、完全勝利だぜ」

「おみごと！ おみごとですわサンラクさんっ！」

「あーうん。レベルも低くて武器もそう強化もしてないのに、よくやるよ。最後にはめ技やめてまで向かい合ったのは舐めプ？」

「端的に言って決意表明的なやつで、意味なんてねえさ。しっかし物足りねーな」

蜘蛛の習性も生態もだいたい見慣れてて聞き慣れてるから、一挙一動が手に取るように分かったし……ステータス画面を見ている風のサンラクからそう愚痴のように言われても「へ、へえ」としか答えようが無かった。

陽務家の母の趣味。京極は楽郎がたまに愚痴のように零す話でしか聞いていなかったが、どうやら想像の遥か上のようで有りもしない

唾を飲むように喉が動いていた。

何度となく遊びに行っている家には、どうやら知らない方が良さそうな光景があるらしい。見たいような、見たくないような……。

「……うーん」

サンラクがステータス画面を見てなにやら悩み出したので、ふと先程のメッセージを再度開く。

「……んー」

奇しくもサンラクと似たように、そのメッセージの内容には悩まざるを得なかった。

「ん？」

いつの間にか開いていた窓から、その伝書鳩メールバードはサバイバルの元へと舞い降りてきた。

高速便の隼の脚から紙片を外す。その、送られてきた何某からのメッセージはというと。

件名『お久しぶり(\*^\_^\*)』

本文『やあやあご無沙汰。相変わらず不毛な事やってるんだって？着せ替え隊の事、よく噂を聞くよ。ついこの間の白熱した動画も見たけど、サバイバル君のデタラメなところも相変わらずだなんて。こっから本題。』

そんな相も変わらずお強い君に、別ゲーで知り合った私のフレンドからオファーだよ。まあ、そもそもは私からのなんだけどね。

阿修羅会関係なしの、私の選抜パーティでウエザエモンを攻略したい。

ついては日を改めて直に、どこかの蛇の林檎で顔を合わせて話を詰めようと思います。サンラクさんと京極ちゃんと君と私、そしてあとたぶんもう1人、頼れる助っ人が揃ってからね。

面白い事には誘え、って話なんでしょ？ サンラクさんに確認したって構わないから、そのつもりで準備よろしくお願いしマース☆』



.....??

? .....は?

「は？」

情報で死角から殴られたサバイバル、心底からの声だった。

【始まりの街 ファステイア】の【蛇の林檎】にて。

いつも通りダラダラと、しかし”ムスカイ”とシャンフロで再会した以上、今後何かしら楽しい事になると確信もあり、普段より数段上機嫌な面持ちで過ごしていた。

それこそあの頃の話でもしながらに、戦闘多めの激しいイベントやダンジョンにそのうちサンラクを（Lv的に時期尚早、なんて考えもせず）ヤシロバード共々誘おうとスキルやステータス、装備を改めていた。その矢先に飛んできた伝書鳥の内容がこれだ。

「?? .....??」

まだアイツはあの墓守に拘ってんのか。

なんでサンラクの名前が？

あのペンシルゴンがサンラクとフレンド？

助っ人って誰だよ。つーかサンラクのやつまだLv50にや遠からうよ。

俺とアイツとアイツとサンラクのヤツともう1人でつて5人じゃねえか少ねえよ。そもそも阿修羅会とのこたあどうする気だ？

これホントのホントに本気というか正気か??

これはまだるっこしい手法のPKだと言われた方が、

「そらやつぱりな!!」と思えた。

だが、気にすべきはサンラクの名前が出ている点だ。

サンラクとフレンドになったのはつい先日。そしてわざわざ吹聴する話でもない。それこそよく話す間柄の着せ替え隊の誰にも話していない。

なのに、なぜペンシルゴンがサンラクを知っている？

「サンラクのやつがたまたまヤツらに襲われて……仕方なしに俺の名前を出した？」

それは——ない。

あの孤島での姿しか知らないが、あれほどにキレるヤツの事だ。誰かに継るような考え方があるとは思えない。サバイバルとてそうであるから。

サンラクのことだ。たとえ幾度となくリスクされた所で、いつか牙を向いて、高笑うその喉を食い破るのは想像に易い。

いかにLv差があろうがやりようによつては一矢報いる、シヤンプロシステムでなら起こり得る話だ。そうならそうならそうなら面白い話。

「そつういやそもそもサンラクの傍には」

あの京極がいるはずだ。

阿修羅会においてのキルスコアで3位。あのメンツの中で自身に次ぐ対人の猛者、になった。妙に厄介な手癖、異様な直感を見に付け始めた刀使い。

『え？　なんかやたら感覚鋭くなつてないかって？　……ん、まあ別ゲーでちよつと』

なんてうそぶいてそつういえばその頃からやたらと鯉口を鳴らすようになったようななんとなく孤島のあの雰囲気に近い空気をまとつてたような……

まあ、いい。

サバイバルが抜ける間際の頃、そんな京極と3連手合わせして2度勝ち、1度は分けた。その勝ちもまた辛勝である。

あの強さ。阿修羅会の面々なら身をもつて知っている訳で、そんな京極が傍にいるなら襲うとも思えず、たとえ襲つても返り討ちだろう。

そつうかそつもの話。

いくら連中がひよつていいるからとて、あんなあからさまニュービーなサンラクを襲うメリットなど、皆目見当つかないのだが。

「まあわかんねえな。いつか、なんでも」

了解。とだけ返信することにした。

サンラクにもあとで確認のメツセージを飛ばす腹積もりだ。なに

せ相手はあのペンシルゴン。どういう伝手で何を得てどんな構想を抱いているか、それを見通すにはよほど頭のキレる人物を巻き込むか、咄嗟の身代わりを用立てるしかないのだから。

この場で考えるだけ無駄、だが用心はしよう。

「ピエー」

たった一言どころか1単語だけ書いた手紙を、その足に括り付けた。

頬杖ついて、窓から飛び立っていく伝書鳩メールバードを見送る。

それにしても。

「ウエザエモン、ねえ」

## 幼馴染

7月の下旬。時刻は午前11時を優に過ぎている。

つまり真つ昼間——この時期この時間に外なんか出歩くもんじゃないやねえっつ!!

「ただい、まゝあゝあゝーっつ」

「お邪魔します」

あゝーあゝっつっちいっつ!!ゝゝ!

京都に住んで長いけど、あいつ変わらず夏は地獄かよ?! たかだか10分かそこから出歩くだけで汗が、滝のようだよっ!

毎度の事だがこうなると道着や竹刀袋がいつに増して重たく感じる、ええい、こんなもんその辺に置いてでシャワーとつとと浴びてキメるもんキメないとしんじまうっ!

「昔つからなのになつた。龍宮院りゅうきゅういんからここまで歩いただけで大袈裟な……それにまーた散らかして。竹刀も道着も後でちゃんと片付けなよー、つて、……もうとことんだね。」

楽郎、靴ぐらいちゃんど……あれ? 瑠美ちゃんと仙次さんはバイトと釣りだろうからともかく、永華さんまで居ないの?」

「えゝゝ? うん? んー……ああ、そういやどつかの大学にちよつと呼ばれてるーとか言ってたような……気がする」

休みだからって今朝の稽古のこと忘れて寝坊したからなあ。慌てて出掛ける俺になんか、そんなこと言ってたような、どうだったっけなあ。

「あ——ああっ、そう! そうなんだあ。永華さんがね、そう。ふーん? そういうタイミングあるよね、うんうん」

俺の靴もわざわざ揃えながら何キョドってた……? いや何でもいいとつとと行動する!

「いつまでもこんな汗だくでいたくねえ。シャワー先に済ませる、テキトーに待つてろ」

「そこは女子優先してくれないのほんと楽郎だよね」

「男女平等を尊ぶ精神がわからねえヤツはこれだから」

「平等を尊ぶならこつちが先でも良いじゃんか」

「家族不在の今俺が家主だから俺が決めまーす」

「客分の扱い雑じゃない？」

「客分って間柄でもねーだろ今更。何年の付き合いだと……そういや稽古終わり、お前がウチにこうして通うのって何年くらい続いてたっけ」

「——10年経ったかそのくらいじゃない？まあもう分かったからほらいつてきなよ。汗も暑さも私だってイヤなんだから、なるべく早くよろしくね」

へいへい速攻で済ますから待ってろー。

「あゝあー……っ」

シャワー!! 最高っ!! こんなお湯を浴びるだけの行為がどうしてこうも心地いいのか……ああ発明した人間誰か知らんが感謝だよマジで。

で。

カシユーンツ、グビィツツ!!

「い、いきかえる……っっ!!」

はああーっ! つばよお、稽古の後は風呂上がりに冷えたライオツトブラッド(無印)に限るなあっっ! つふううううっ!! ああ脈動と共に炭酸に乗ったカフェインが奔るうう、俺の体の隅々に染み渡るうう……。

「っ、だああ……はあ」

クーラーのガンツガン効いた部屋。ヒンヤリしたベッド。特にベッドはいいなあ。ああ、やわらつけえええ……。道場の固え床とはまるで比べ物にならねえよこんなん……くはああ、ここが天国これぞ楽園<sup>エデン</sup>……。

「あああ。……今日もつらかった」

國綱さん……突きは、突きは辞めろと。手加減してる、ってそりやそうだとっても首垂とセフガあるからってそもそも怖えし衝撃

ぐああさあああもお。

胴は胴で垂と腹帯あるからそう痛みこそないが、怪我にはならんからってブアアシンツツ!! ってあの音なんなの? 防具無かったら俺の腹吹っ飛んでんじゃね?

小手の受け方は褒められるのもあるのか、最近そうそう痛くならななんだよなー。が、なーんか受ける度に歯ぎしり聞こえたのも、直後の胴がやたら勢いあったのも気の所為だよな?

——面打ちだけは別の者と練習しろ。なぜってそれはなあ、俺がお前相手に面打ちはなあ。……つははは、うむ。——本気で潰、っんん……全力で打ち込みかねんからなあ、ハハハ——……。

「剣はともかく誤魔化し方は下手くそだよなあ」

嫌われてる……訳では無いと思いたい。面打ちの手加減が下手なだけだろう、きつと。

京極の家……龍宮院家の剣道稽古は毎度毎度こっちも全力だ。初段になって2年経った。2段も狙える時期に差し掛かっている。

小学生時代からのらりくらり、何だかんだと続けては来た訳だし。それにこの先、より昇段していけば将来的に助かる事もあるかもだし、お前なら狙えるからやれ、って背中押されてるから気合い入れて稽古の時は頑張ってる訳だが。

しんどいものは、しんどいのだ。特に國綱さん相手はよくよく地獄を見る。明日絶対筋肉痛だな。

まあ実益と趣味に繋がるのは大きいから尚更、やれる所までやりきるけど。

VRゲーマーたるもの健康な身体作りには手は抜けない。クソゲーマーと同様だ。VRゲームでのパフォーマンスに繋がるし……けどどうにも、道場に通う回数を減らすかどうかについては高校に入ってから日々考えざるを得ない。

ただなあ……。なんとなく國綱さんのしごきが、当たりが強くなっていったる気がするんだよなあ。特に京極が居合わせるとより厳しくするのは何であの人。

「ん? メッセージ……なんだ」

通知音に携帯端末を見れば京極の名前があった。まだ風呂だろさ  
すがに……。

『件名：無題』

『本文：持ってきたスポドリ飲み切っちゃった。なんか飲んでいい？

当然エナドリ以外でよろしく』

当然ってなんだ当然って。ライオットブラッド以外い？ ならエ  
ナジーカイザーとスケアクロウとヘルブリザードのパンピー向け  
ジュースを混ぜて飲ませてやろうか。いやいまでも切らしてるか  
ら出せないけどな、運の良い奴め。

『件目：Re 無題』

『本文：好きに飲めよ。俺ならともかくお前が飲んだって言や誰も気  
にしねえから。なんなら入れとくぜ、麦茶割のライオットブラッドと  
ライオットブラッド割の麦茶なら用意するが？』

『件目：Re Re 無題』

『本文：麦茶あるなら麦茶飲むかな。用意してくれるならお昼ご飯が  
いいなあ』

「へいへい……——ソーメンでいいかあ」

暑いし疲れて手間かけるものはちよつとめんどくせえし……あ。  
そういえば、我が家の甲虫達に食わせるモノの余りがあったな。カッ  
トされてるから出す手間も要らない。

『件目：Re Re Re 無題』

『本文：ソーメン用意してやんよ。あと母さんが食ってもいいって  
言ってたスイカがあるんだが、お前も食う？』

『件目：Re Re Re Re 無題』

『本文：ほんと！ やった、食べる食べる！ ありがとう！』

母さんの趣味ヲのエサの残りだが、ってここで言ったらどんな顔する  
かな？ ……いや俺にもいくらかダメージくるから言わない方がい  
い、これもまた沈黙の美德。

「さてとー」

そうと決まれば始めるか。出来上がるかってくらいで、アイツも身  
支度を整える頃合いになるだろう。

階下に降りて台所へ。

「あつれここじゃなかったっけか……あつたあつた」

鍋に火をかけつつ乾麺を探り出した頃。ふと、換気扇の音に紛れて、脱衣所の方から微かにドライヤーの音が響いてきている事に気が付く。

思っていたより早かったようだ。

やがて沸騰したお湯に乾麺を落としきり、タイマーを設定した所で、足音が近づいてきた。

「はあー。さっぱりした。あ、麦茶ありがとう」

「おー。こつちは待つてる、今さつき鍋に麺入れたとこだからさ」

「ふはっ。ん、わかったよ。……そうか、それじゃあちよつと失礼するよ」

「うん？」

麦茶を飲み干してお代わりを注いだコップを、ダイニングテーブルに置いて。近寄って来た京極が、何やらゴソゴソがちゃがちゃと動き回る……なにやっつてんだ？

「冷蔵庫のもの使っちゃいけないのってある？」

「最近になって瑠美のお願いが叶ってな。」

ブラックボックス  
両親の趣味領域はそれぞれの部屋備え付けになったから、安心しろ。何処のどれから使ってもいいぞお前なら」

「……ちなみに今は何入ってるの？」

「そこから移動させる時チラツと見てたけど、お前が昔悲鳴上げた時からさらにグレードアップしてたぞ。今も昔も、おおよそ釣り好き以外には受け入れ難いあれやそれやだが、知りたいのか？」

「止めて」

そうか。特に父さんの言う、ユムシとホンコウジの違いは俺にはイマイチ分からなかったから、説明するには持つてくるしかなかった。……正直俺だって食前に見たくはない。

「——ここにアレらが帰って来ないことを願ってるよ。じゃ、ここから遠慮なく……これとこれと……よし。包丁と、ボウル借りるねー」  
「なにしてるの？」



「用意してもらってばっかりだったから、ちよつと美味しい麺つゆでも用意しようかと思つて」

ねー、と言いつつキッチンテーブルに淀みなく色々用意した京極が、鍋を見守る俺の隣で梅干しやら大葉やらを刻み出す。ふむ、せっかくなんか用意してくれるってんなら楽しみしておこう。京極の作る、特に和食は美味しい。しかし麺つゆか、どうするんだろ……

ぐつぐつ……

とんとん……

「……はらへつてきた」

「わたしも……あ、鳴つた鳴つた。後は私がやつちやうから場所空けて」

「あいよ。任した。んじや俺は俺のと確かこの辺に京極の箸……あつたあつた。あとは……」

取り皿と、菜箸……は要らないか別に。どうせ俺達だけが食べるんだし……というか菜箸も取り皿も使うのかそもそも。はて。

「……梅干しと大葉は見てたが、ニンニクチューブと？ オリーブオイルに……ん？」

細かく刻まれた梅干しと大葉、小さじにも満たないニンニクと、オリーブオイルに、あとなんか砕かれたっぽい茶色のツブツブの……なんだ？

え？ 梅以外全部ボウルに入れて麺つゆ入れて麺を入れて混ぜてえ？ え？ あ、でも美味そうな感じの色合いに……

「おお。なんか少し不安になったけどイイなこれ。美味そう」

「実際美味しいよ。さっぱりしてて、暑い今にはピッタリさ。仕上げに梅をこう……乗っけて……よし、これで出来た。はいこれ楽郎の分ね」

「さんきゅ」

用意した食器類と受け取った俺の分をダイニングテーブルに運んで。わりとすぐ京極も自分の分を作り上げて席に着いた。

「いただきます——あぐふむ」

「いや落ち着いて食べなよ……」

漂う香りと空腹に負けてがつついていた。そう呆れるなつて——  
おお……。

「うまつ」

「でしよ？」

……

「はあー、満足した」

「スイカの片付けはやつとくよ」

「ソーメンは俺が片付けたし、ここは任せよう。……さて。」

「この後どうすっかなー」

「て、てつきりシャンフロやるもんだと思つていたんだけど。ペンシルゴンとの約束は夜だし、だいぶ時間あるから攻略進めるんじゃないの？ どうせ今私はシャンフロでさしてやることないから、それに付き添うかなつて……他に、したいことでも何かあるなら聞くけど？」

さすがに夕飯前には家に帰るけど……、と洗い物をしつつ京極が言う。

うーんシャンフロなあ、それもありだしそうする気だったんだよな。

今朝までは。

「ああ、時間まで……んー。そう、だな」

道化蜘蛛<sup>エリアホス</sup>を仕留めてそれから京タイムットと別行動して、ラビッツで例のクエストぶっ続けでやり遂げて晴れてラビッツ国民になつたつけな。……ちい。トキシックイーグルうう、あの名前だけはぜつてえ忘れねえぞ……。

とにかく。

これでようやく真つ当にレベリングできるようになった。チョーカー、首輪が消えたのはちよつとばかり惜しいが、レベルが上がらない方が困る事は多い。ただでさえ忌々しい狼の呪いがあるんだ、これ以上縛りを増やしたくはない。

よって、じゃあ腰入れてレベリングするかあ、という気分だったのだ。

今朝、稽古をするまでは。

「——剣で受けた鬱憤はよ、剣で晴らすのが気持ちいいとは思わねえ？」

「……ふーん？」

途端。手を拭いた京極が据わった目付きで、そして人の悪そうな笑い方でニヤニヤと見つめてくる。

もつとも、きつと俺だって人の事を言えた顔つきではなかったらう。

道場稽古でミツチミチのギツタギタに剣でぶちのめされたのなら、同じく剣カを振るってくるヤツらを合法的に切り刻める所に行けば晴れるモノもある。

この心の動きこそ天の声、即ち——天誅である。



PVPの沼地、人を人とも思わないヒトでなし共の巣窟、辻斬カブリッチョ・狂想曲：オンライン。通称『幕末』へと意気揚々に身を投じた。  
が。

——あれ？ なんだ？

「……誰もいない？」

どこぞの布団で目を覚ますようにログイン。直後、あるはずの感覚が来ないことに困惑する。

幕末においてログイン、あるいはリスボンする際はゲームマップ上に何ヶ所か点在する平屋へと、プレイヤーは光を伴って現れる。その際の光は平屋から外へ届き、戸を、襖を開いて出ようとする瞬間を狙います『ログイン天誅』……かつて俺が考案し今では幕末に身をやつした大体の連中がやっている、それが無い。



リスポーン待機状態のままゲーム内インフォメーションを呼び出し、……『夏のイベント開催中』の1文で悟った。

——幕末ね。OK付き合うけど、昨日そんなに人は居なかったからあんまり期待しない方がいいよ——

——マジ？ ま、けど京ティメットさんがいるからいいだろ——

——あつはつは。返り討ちにしてあげるよ——

……………アイツ。

「京極……」

『そんなには人は居なかった』、ねえ？

ふふふ……………ふふふふふふ——つはは……………っ！

「ハハは、はハはははハハっツ——!!」

リスポーンを選択。跳ね起きる様に動きつつ二丁拳銃を取り出して、直後、速攻で襖をぶち開けて、半秒。慌てたように投げ放つて来たが、半秒もあれば人員の配置と手元を確認するにはお釣りが来るってんだよ！

「はつは——！ 乱射そごらへんだああっ!!」

投げられた多数の火の玉……………なるほどインフォメーションにあった通りどう見ても「人魂」だな？ ……「人魂」としか形容できないそれらに向かつてひたすらに銃弾を撃ちまくるっ。

何発かが数個を撃ち抜き、爆発させた所で周りの人魂にも誘爆。前方一帯を吹き飛ばして、その爆音に負けじと腹の底から叫びが溢れていた。

「——京ティメットおおおおおーっ!!」

家でマツタリとした時間を過ごした相手だったから？ 満腹だったから？ この頃ゲーム内ですらよくよく一緒にいて心を許してる相手だったから？

なるほど油断する材料はあったな。俺としたことが素でアイツの言う事をまるきり信じちまったらしい。

だがだとしても、まさか!!

この俺が!!

ああも簡単にログイン天誅をされるなんて!!

そも——お前に凶られるなんてなあ?!

さすがに襖を開けたら正面一杯の爆弾は初見じや回避できねえつて、っていうのはこの際どうだっついていい!

やられたっ! この屈辱……!」

「くくく……必ずこの屈辱は晴らすぞお?」

体が震えるくらい負のエネルギーがメラメラしてるのが分かるぞお? シャンフロ並とは言わねえが、今のこの感覚ならよお。

足の先にまで、指の先にまで集中できらあ。これならやってやらあ、必ず天誅してやらあつ!

「京ティメット……いや幕末ランカー、ほうれん草ちゃんよおつ!」

しかし。走りながらふとそれはそれとして感慨深い……いや京極、成長したなあ。



「……楽郎は、やっぱり楽郎だなあ」

見慣れた部屋でいつもの通り、ゲーミングチェアを使えと譲られて。数分後。

ログインするフリをして被っていたVRヘッドセットを外し、傍のベッドで横になっている楽郎を見て……ため息をついた。

幕末のイベントは無論の事知っていた。なんせ幕末は魂あそこの場所だ、存在を知ったこの1年近くほぼほぼ毎晩少なくとも30分以上(※当社比)はオンしている。一昨日から始まったらしい、上位ランカーも主に紅蓮寧土ことフラバンや、あいつ(くいつ)こと摩天楼が大暴れしているこのイベントとて2日とも参加している。

『爆弾も花火もその辺で幾らでも補充できるとかボーナスゲームじゃん』

『テキトーに射ってもそこかしこで爆裂してポイント稼げて笑いも指も止まらない』

とかなんとか。さておき。

今のトレンドは投げればお手軽な爆薬と化す人魂を用いた、イベント期間限定のログイン天誅。初見で不意をつかれれば如何な反射神経の優れたサンラクといえど、視界一面の爆薬に1度は昇天するのは間違いない。……そして今頃は過疎っていたなどとホラを吹いた仕返しに、幕末内で京極キョウアルテイメツトを探し回っているのだろうかあの般若面は。いや、今はそうして欲しい。

「いつもみたいゲームをするような、そういう気分にはなれなかったよ」

2人きりなのに。風呂上がりなのに。永華いっもさんがいる時みたいにくっくり入れなかったのに。着替える時だってだからそれはもう色々……意識、してしまっていたから、こそ。

部屋に來た瞬間なんてどんな顔をしていたのか分からないし、幕末の話はしたけど詳細はもう何を話していたかも臆気だ。それこそ、ゲームシヨップにて樂郎がワゴンを漁る中、密かに岩巻さんから勧められた事のある、乙女せういづゲームの色々なシーンが脳裏を次々よぎつて、もはや苦しい位だった。

そんな事あるわけない。ゲームみたいな展開を樂郎に限ってしてくるわけない。ありえない。ああでも、いやまさか、けれどひよつとして、そんなのあるわけ、だけでも万が一億が一そういう事も無きにしても非ずすわああ辞せの句が浮かんで——  
だから。

樂郎には不自然にならない程度に背を向けつつ、樂郎の部屋にわざわざスペースを作つて置かれている、京極専用のヘッドセットで熱くして仕方ない顔を隠すようにしていた。

その一方で。

なんて事ない態度で。いつも通りの口調で。あるがまま振舞つてゲームへとログインして行つた樂郎を、今こうして見ていると、無性に込み上げてくる気持ちがある。

「人の気も知らないで自分だけいつも通りで、もう……」

悔しい……けど、少し安心しているのも事実だった。

「——っ。あーあ、コレも弱味かなあああ……」

少しの安心——は、あれども、悔しいのは事実。胸中のそれが今まさにコンコンと湧く感覚に、京極は深呼吸と瞑目を数度重ねて心を深く沈ませていく。

「よっし落ち着いた落ち着いてきた。——ふっふふふ、待っててねサンラク。君にその気は無かったとしてもこんなにも濮を……いやその気が無かったって言うのもめちやくちやにシヤクだな……ふんっ。とにかく、こんなにも僕を振り回してくれたんだから、これは是非ともお返しに行かなきゃね？」

意識は既に京極から京キョウアルテイメット極へ。ヘッドセットを被り直し、手馴れた仕草で幕末へのログイン処理を済ませていった。

☆

### 幕末イベント☒綺羅星花火☒

ゲーム内は現実が日中なら逢魔時、夜間は丑三つ時固定だよ！

プレイヤーを倒すとストレージ内のアイテムの他、『人魂』をドロップするぞ！ 人魂はストレージに仕舞えないからよろしくね！ イベント期間中にたくさんの人魂を集めて競走してね！

イベント中はマップの至る所に爆弾アイテムの『花火』があるよ！あと『人魂』は花火より強力な爆弾としても使えるよ！ なお使つ

たら無くなるから注意してね！

こわい人魂と派手な花火！ さあ夏を楽しもう！

☆



## 京のクソゲーマー5 ペンシルゴンは話したい



「結局ペンシルゴンは何でわざわざお前もサバイバルも呼んでるんだ？」

「さあねえ？ 着けば分かるさあ……っ！」

ラビッツからサードレマへとエムルを伴って移動。そこでほぼ同時刻にログインした京ティメットと合流できたのは、こうしてサードレマを歩いてみると正直助かった。

ファステイアは広場がやたら多すぎて迷ったが、サードレマは単純に広すぎてまた迷う所だった。

「ううううっ……。諸共なんてよくも。ぼくの、ぼくの3日間をよくもこのサンラクウ……」

なんてウジウジしてる幕末の囁ささりで胸がポッカポカでついニコニコしながら歩いて、京ティメットの目付きが俺と刀を行ったり来たりして首元が落ち着きなくブルブルしだした頃。

スムーズに和やかに、俺達は目的地、待ち合わせ場所の蛇の林檎（in サードレマ店）に到着できた。

「はいはい到着到着、と」

扉を開けば直ぐに店内ホールで、先に到着していたらしい面々が5人掛けの丸テーブルに座って待っていた。

なんでか苦い顔のペンシルゴんと、何を考えたのかやたらとあざとい女性アバターになってるカツツオ……オイカツツオって今度は追いかよ。

「先に来てた——か」

その2人、と……ん？

ん?? んん??

「ようサンラク。始めたてのくせに、派手にやってるらしいじゃねえか」

手を挙げて俺を気さくに呼ぶ女性アバターからのひつくい声。傷ペイントを貼っつけた顔で男らしく笑ってるヤツの名前は——サバイバアル……だ？

ま、間違いなくサバイバアルだ。でもなんだその、着てる、服、いや装備？ 装備、だろうけどなんだその、どうみても……

「なんでビキニ？」

「半裸てめえがそれを気にするたあな。なに、備えありやあ憂いなしつつうだろう？」

「だろうって言われてもなあ」

いわゆるビキニアーマー姿でそんなドヤられても……。

「備えて何の備えでビキニになるんだよ」

「ほお！（半音上がった声）なんだよサンラクそんなに気になってそーんなに聞きてえんじや仕方ねえ、初心者のお前さんにこの俺が言葉を尽くしてこの完つつ璧な一張羅を、そうして俺のオアシスであるティーアスたんを語ってや」

「いやいい、いらんいらん」

鼻息荒くして語ろうとしてんじやねえよ。正直あの孤島でのお前からは全く想像つかないあり様はすんげえ気になる……が、面倒くさそうな気配からは逃げるに限る。

「京……極さんはシャンフロでも名前それなんだね。それなりに久しぶり？ かな」

「……あ、カツツオってやっぱりカツツオさんか」

「そ。俺はシャンフロだとオイカツツオ。こっちでもカツツオ呼びでいいよ。シャンフロでもよろしく」

「りよーかい。おっしやる通り、僕はここでも京極。よろしくカツツオ……あっちもやっぱりまだやってるの？」

「なんだかんだね。過疎ってる割にオンした時には新しいコンボ開発されてたりするからさ、中々いい刺激になるんだよ。そっちはサンラクとまた来たりしないの？」

「全身の関節が回転してすっ転んだが最後延々と転がり続ける格ゲーはちよつと……」

まだ何としても語りたそうなサバイバルを他所に、京ティメット共々席について。

京ティメットは隣のカッツオに声をかけられて便秘のモデルカッツオとようやく合致したらしい。ゲームの容姿は統一する派からしたらピンと来なかつたか。俺はそもそも、

アイスクリーム（餓えたホームレスがラスボス）とか、ガゼル（ライオン一強対抗馬ゴリラのアニマル格闘ゲー）とか、カブトムシ（小学生から逃れる極限脱出ゲーとかいうDLC）とか、色々なアバターを操作するから統一感とかなにそれ？ つて訳だが。

カッツオもカッツオであつちこつちで見た目全然違うしな。そのゲームエンジンから自分で操作するキャラの最適解でアバター作ってるっぽいし。

「や、2人とも。で、まだなんか話したそうなサバイバルくん？この場でこれ以上は私が話させないからネ？」

「あ、僕からも同じく。どうしても話したいなら他所でやってよね」「かーっ。揃いも揃ってロマンが分からねえ女共だこと」

「ふん」

「おいおい……」

訳が分からないが女性陣2人からしたら地雷な話題なのか？ 京ティメットからは中指立ててまで止められて不貞腐れてらサバイバルのやつ。というか京ティメットお前それもしかしくなくても俺の……間違つても龍宮院の家で、特に國綱さんとかの前でやるなよ……？ ガチで。

しかしそれにしてもサバイバルもなに？ 何だ、何があつたらビキニアーマーを一張羅なんて言う事になるってんだ？

あの<sup>バイバル</sup>の野人に何が……。

「いや他人の事気にしてるけどサンラクさあ、俺からしたらお前だつてなにその、その、なに？」

「おい」

「半裸にマフラーに鳥マスクって……」

「やめろって」

同類を見る目でサバイバルと半裸鳥頭とを交互に見比べるんじゃない一緒にするな！ なまじそのあざつつつとい見てくれでやられると中身を知っても居心地が悪い……！

だいたい街中で水着それも露出度高いビキニ姿と、ただの半裸ならどっちかっていうと俺の方がマシだろ！ 五十歩百歩？ 少なくとも五十歩は俺だから百歩も逸脱してねえから。

「というかそっちだって人のこと言えた面かよカツツオ」

「人の面でもないヤツから面のことを言われたくはないかなあ」

「そっちだって人のこと言えた面かよカツツオ」

「わざわざ外してまで言い直すのそれ」

そしてへい俺の首元のマフラーちゃんよ。鳥面外した瞬間から何を強ばってんのか知らねえがあまり動くなバレたくないんだろ？ ポンポンツとな、ったく……

「鳥面は仕方ねえから着けてんだよ……」  
被り直す。

あーあ。半裸を強制されて被り物で誤魔化すしか、ろくな格好できねえんだよなあ。まったくそれもこれも、あんのくそ犬のせいだ！

シャンフロやるとなると毎回カウンターを回すようだおのれリユカオーンってなア……ツ！

俺も防具ワンセット装備してあの防具のこのスキルとあれとがさ、とかなんとか言ってみてえなあシャンフロで……。

「仕方なくって言いながらどうせネタに走ったんだろうに。ま、この辺で止めといてあげるか。趣味をとやかく言うのも悪いし？」

「ピースしろよカツツオ。『材料です』ってスクショ魔境に投げ込んでやるからよ」

「この拳でもいいならそのふざけた面にくれてやるけど？」

「はーんっ？ やるってのかニュービー！」

「似たようなもんだろ1日程度で先輩面かあ?！」

「ふっ」

俺レベル30。

っ……25。

「ザツツツコ!!」

「ちいいいっ!!」

「はいはいそこまでにしときなよそのドングリ君達。ま、ゲームだから人それぞれの遊び方もあるよねって事で君らのどうでもいい話は<sup>シメ</sup>めて、とりあえず——」

「王族だろうが所詮NPCでしょ？ なんつって釣餌扱いできるような振り切ったヤツは、やっぱりどうして泥沼みたいに懐が深いよなあカツツオ」

「アバターが潰れる音をフルーティなんて信じ難い言葉で評して陶醉しちゃうようなヤツは、やっぱりどうしてタカが外れた感性だなんて感心するよねサンラク」

「よおーっしお姉さん猛烈に初心者狩りがしたくなっちゃったぞうっ！ さあ2人とも、私なりのゲームの楽しみ方を、レベルカンストの暴力をたっぷりとお外で教えただげよーかな？ ね？」

はっはっは。

「上等だお外に出たら円卓か幕末にでも来いよ遊んだらあ！」

「そのカテゴリのゲームで言うなら便秘でも俺は構わないよ」

「どれもクソゲーじゃんかってそうじゃなくてシャンフロの話っ。口グアウトをお外なんて言いませんー！」

「お前他所でもそんなエグいことしてたなのな、驚きはねえが。んで？ シャンフロでケンカするってんなら俺も噛ませろや、なあペンシルゴンよう？」

「そういうことなら僕も僕も。ちよつと直近のペンシルゴンには色々と思うところがあってね。実は今も。果たし……メッセージでもそういうお話したばっかりだし？ ね、ペンシルゴン」

「オーケーオーケー君達寄って集って4対1にするとか言うその発想はやめようね？」

お前好きじゃんそういうの。

されるのはきらいですー！

「で?」

「ね」

「俺達なんて呼ばれたの??」

「トツプ克蘭にでも喧嘩売るのか? それとも城攻めでもすんの??」

「あ、俺はサードレマ落とすとか言うのはもうちよい待って欲しいかなあ」

「はああ、まったく君らはさあ……。ぶつちやけると、ユニークモンスターこの5人で倒そうって話だよー」

「なるほど——え」

「は? ——ってユニークウ……。ツ!」

「……(3外道の絡み、主にサンラクとペンシルゴンの気安い雰囲気を感じる顔)」

「……(阿修羅会では見た事ない、弄られる側の珍しいペンシルゴンにニヤニヤしてる顔)」